

跡寺分国後筑

—Ⅲ—

昭和55年度発掘調査概報

久留米市文化財調査報告書

第 27 集

1981

久留米市教育委員会

久留米市教育委員会

筑後国分寺跡

—Ⅲ—

昭和55年度発掘調査概報

例 言

1. 本書は、昭和55年度に久留米市教育委員会が実施した、久留米市国分町所在筑後国分寺跡の発掘調査概要の報告である。
2. 発掘調査は文化財担当櫻井康治・松村一良・横尾義明が担当し、調査補助員として藤田美佐子が参加した。また第16次調査は、昭和54年度の調査を櫻井が、昭和55年度の調査を古賀壽が担当した。
3. 掲載の実測図の作成と写真撮影は各調査担当者で、藤田、吉富力が行ない、製図は櫻井、藤田が行なった。
各調査担当者は第1表のとおりである。
4. 本書の遺構表示は、下記の略記号に拠る。
SA-築地・堀・橋 SB-建物 SD-溝・濠 SE-井戸
SF-道路 SK-土壇 SX-その他の遺構
5. 本書の執筆は、第20次調査は横尾が当たり、そのほかの執筆と編集は櫻井が担当した。

目 次

I 調查經過	1
II 第 16 次調查	3
III 第 17 次調查	8
IV 第 18 次調查	10
V 第 19 次調查	12
VI 第 20 次調查	14
附 小 結	18

挿図目次

第1図	筑後国分寺跡発掘調査地域図	2
第2図	第16次調査遺構配置図	3
第3図	第16次調査出土遺物	5
第4図	第16次調査出土遺物	6
第5図	第16次調査出土瓦拓影	7
第6図	第17次調査遺構配置図	9
第7図	第18次調査遺構配置図	折込み
第8図	第18次調査出土遺物	11
第9図	筑後国分僧寺跡塔復元図	12
第10図	第19次調査遺構配置図	13
第11図	第19次調査区土層図	14
第12図	第20次調査遺構配置図	15
第13図	主要遺構配置図	17

I 調 査 経 過

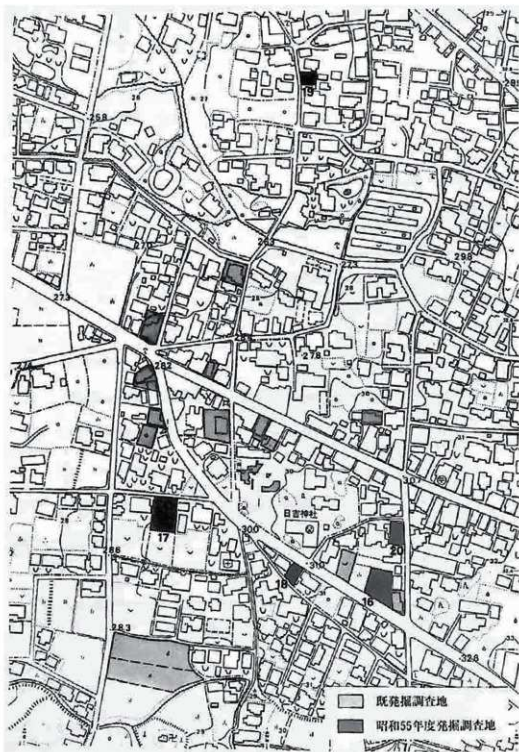
昭和55年度における筑後国分寺跡の発掘調査は、塔の推定地と考えている版築基壇の確認調査をはじめ、4ヶ次の新改築に伴う緊急発掘調査を実施した。調査の結果、釈迦堂が建てられている版築基壇は、基壇上に礎石の抜き跡が発見され、抜き跡の配列状態から塔跡と確認することができた。また、寺域の東限を画する築地跡をさらに検出し、第10次調査時に発見された築地跡を結ぶと、現在の道路や、字谷及び字宮ノ脇の東字界線と一致する。

第16次調査は、所有者との調整において2ヶ年度に分けて発掘調査を実施することにした。昭和54年度に1回目の調査、昭和55年度に補足調査を行った。調査の結果において、遺構の拉がりが当該地のほぼ全面に及ぶために本年度の概報にまとめて掲載することにした。

発掘調査の実施にあたり、東国分公民館ならびに各土地所有者、発掘作業に携わられた高良内、御井町の各位には、多大の御協力と御理解をいただき、付記して深く謝意を表わしたい。

年度	調査回数	調 査 地	面 積	調査担当者
54	16	国分町字宮ノ脇743-17	350 ^{m²}	櫻井、松村
55	17	国分町字政所727-2	200	櫻井、松村
	16次補足	国分町字宮ノ脇743-22	273	古賀
	18	国分町字宮ノ脇742	135	櫻井、松村
	19	国分町字西村497	387	櫻井、松村
	20	国分町字宮ノ脇744-3	1500	横尾

第1表 筑後国分寺跡発掘調査一覧表

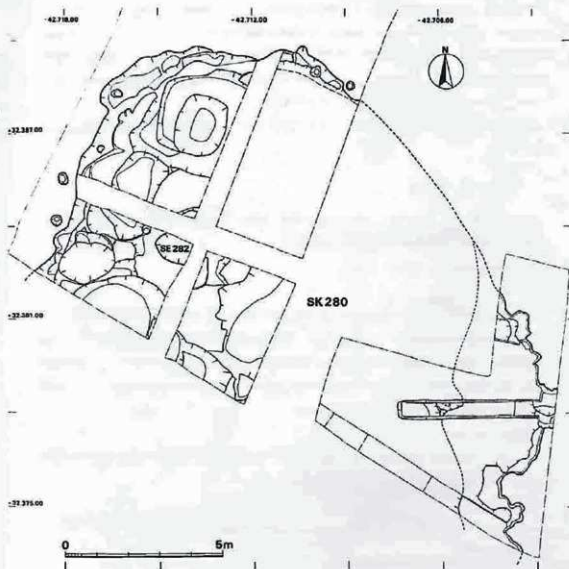


第1図 筑後国分寺跡発掘調査地域図

Ⅱ 第16次調査

1 調査の経過

第16次調査は、店舗兼住宅の建築に伴って事前に緊急発掘調査を実施したものである。調査は、時期的調整ができず所有者の協力を得て、2期に分け、昭和54年11月2日～11月20日まで



第2図 第16次調査遺構配置図(1/50)

実施し、昭和55年9月17日～10月1日まで補足調査を実施した。調査の結果、南北約17m、東西約15m、深さ1.7mを測る摺鉢状の大形土坑状遺構を確認した。補足調査は、前年度の調査の結果より、発掘することは、災害を招く恐れがあるため、遺構の拡がりのみの確認にとどめた。地番は、国分町字宮ノ脇743-17-22番地である。

2 検出遺構

検出した遺構は、大形の土坑状遺構と少数のビットを確認した。

SK 280 南側は道路敷であるため南北の長さは、約17mを確認し、東西約15m 深さ約1.7mを測る。東側は、若干フラット面を持つが西側は急傾斜をもって掘り込まれている。壁面及び底面は一定でなく凸凹がたくさんあり、土取りした跡の様相を呈している。性格は、僧寺域内であることも考慮し、今後さらに追究を要するが、時期は下層において白磁碗の破片が出土することから、中世を遡ることはないと思われる。

SE 282 SK 280の埋没後に掘り込まれた井戸であり、遺構内には礫を含んだ砂質土が堆積する。

3 出土遺物

出土した遺物は、瓦が多数を占めその他土師器、青磁片、白磁片などがみられる。特に鬼瓦の破片や「僧寺」の墨書土器が発見されたのは珍しい。

SK 280出土遺物 (第3・4図)

土師器 (1～9)

1～7は、口径12～15cm、高さ約3.5cmを測る杯である。1～4は直線的な体部を有し、5～7はやや内湾気味の体部をもつ。1～6は、いずれも体部と底部境に寛削り面を持っている。1は底部に「僧寺」の墨書をもつ。8は、口径16.7cm、高さ2.2cmを測る皿であり、直線的な体部と底部の境に寛削り面を持っている。9は、口径20.1cm現高9.8cmを測る甕であり、体部外側に煤が付着している。

須恵器 (10～12)

10・11は、口径約15cm高さ約2.5cmを測る鉤状のつまみを有する杯蓋である。12は長頸壺の底部であり、11とともに外器壁には自然釉が付着している。

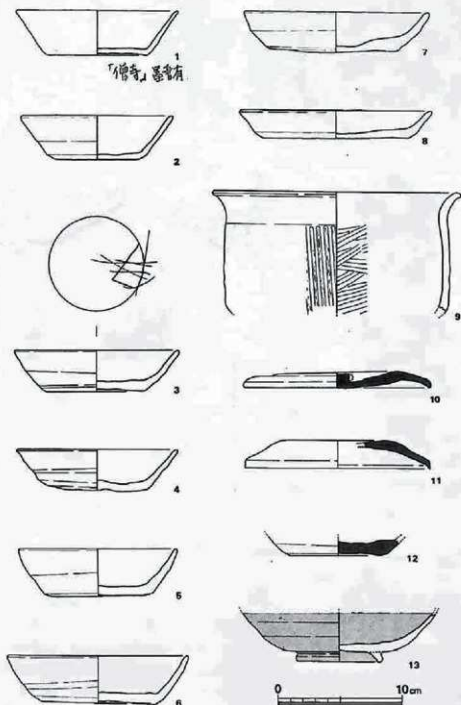
黒色土器 (13)

高台径7cmの碗で器壁は丁寧に磨きされているが、若干摩耗している。

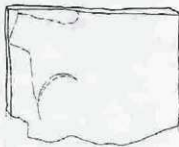
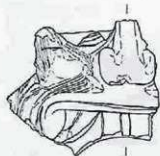
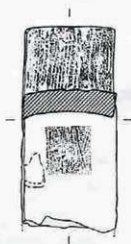
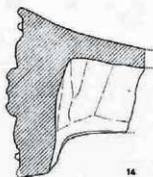
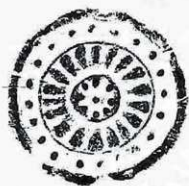
瓦 類 (14～21)

軒丸瓦 (14～16)

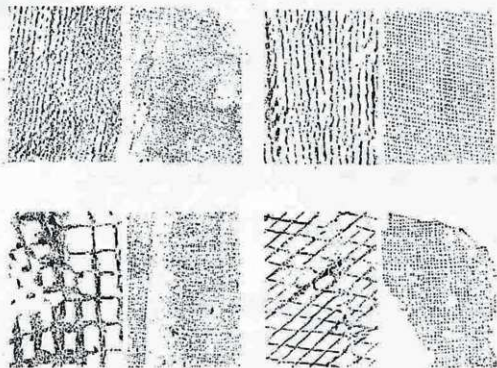
丸瓦はほとんど欠損し、瓦当部のみである。14は、瓦当部と丸瓦の一部であり、瓦当表面は



第3圖 第16次調査出土遺物（片）



第4圖 第16次調査出土遺物 (凡)



第5図 第16次調査出土瓦拓影(片)

焼きはあまりよくない。瓦当部は、丸味を持つ直立縁の外縁と内縁に20個の珠文を有する。内区は、単弁十八弁の蓮華文で子葉弁及び間弁はみられない。中房は、外縁よりもさらに突出しており、1+8の蓮子を有する。15は、焼きが悪く表面は摩耗が著しく褐色を呈する。文様は、外区縁に珠文、内区は複弁蓮華文と中房に1+4+8の蓮子を有する。16は筑後国分寺跡で最も多く発見される単弁九弁の軒九瓦である。

軒平瓦 (17)

焼成はよく、部分的に黒褐色を呈する。内区は均整唐草文が陽刻され、上外区に珠文を有するものである。

契斗瓦 (18・19)

凸面に縄目文と格子文の2種類である。18は凸面縄目文を有するもので、凹凸両面にへうによる線刻がみられる。19は凸面に長方形格子文を付したもので幅約8.5cmを測るが、ほかに幅約7.5cmを測るものもみられる。凹面はいずれも布目文である。

鬼瓦 (20)

鬼面中央の一部であり、全面的に肉の盛上がりがよく、太目の鼻と頬をかなり高くあらわしている。器体表面は縄目文を付している。焼成は良く、色相も暗灰青色を呈し堅固である。

埴 (21)

幅約18.5cm、現存長約14.5cmを測る無文埴である。焼成は良く堅固であるが、表面はやや摩耗する。製作方法は、三枚の粘土板を重ねて焼成されたもので、そのうちの一枚が接合面から剥離しており、全体の厚さは約9cmが推測できる。

丸瓦・平瓦 (第5圖)

丸瓦は、凸面に叩き文はみられず、寛による調整のみであり、玉縁丸瓦が殆んどで、行基丸瓦は認められない。平瓦の凸面は、縄目文、格子文、斜格子文がみられるが、なかでも縄目文が多く、続いて格子文・斜格子文である。凹面はいずれも布目を付している。

III 第 17 次 調 査

1 調 査 の 経 過

個人の専用住宅の建築による事前の調査である。当該地は、日吉神社境内にある講堂跡の西南約60mに位置し、第8次調査との関連から寺域の西限が予測されるとして、東西にトレンチを設定した。調査の結果、東西方向の溝状遺構及び土壇ピットを確認した。地番は、国分町字政所727-2番地である。

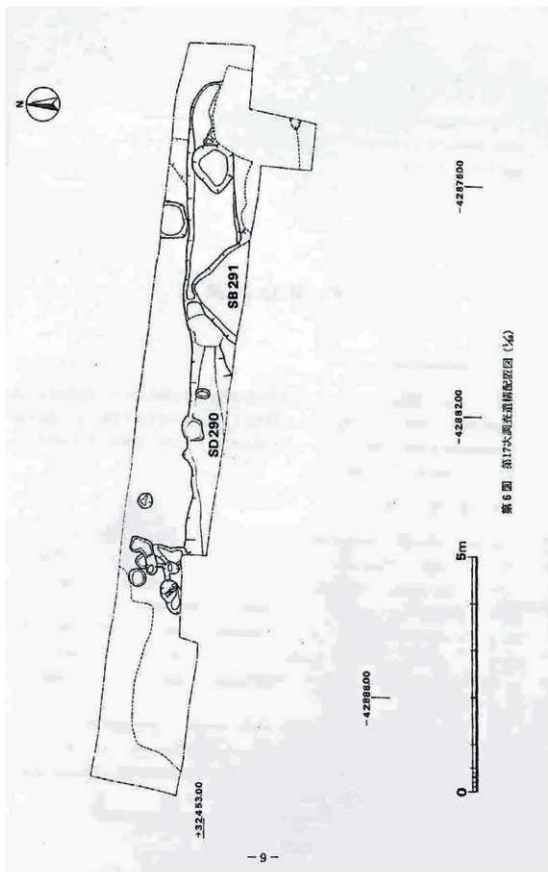
2 検 出 遺 構

検出した遺構は、溝状遺構1と土壇1、ピット少数である。トレンチの西端部は、深く削平を受けており、範囲もかなり広がるものと考えられる。

SD 290 東西に走向する溝状遺構であり、幅約1mを測り、長さ約12m、深さ8~17cmを検出した。遺構は、トレンチ東端部で終わっているが、調査区全体は削平を受けているものと考えられ、西へは勿論のこと、さらに東へものびるものと考えられる。底面は東から西への傾斜がみられる。

SK 291 SD290を切っている。2辺はそれぞれ約1.5mを検出し、底面はほぼ平らで深さ7cm程である。

その他、溝状遺構沿いに1辺約80cmを測る。方形のピットを1基検出したが、柱痕は確認できなかった。



第6圖 第17次調査遺構配置図 (1/60)

3 出土遺物

出土した遺物は、弥生土器、土師器、瓦等を発見した。S K 291は弥生土器片が多数出土したが、川原石が2～3点さらに瓦片2点も発見された。S D 290の出土遺物は、瓦片と土師器の小片のみ発見された。

Ⅳ 第18次調査

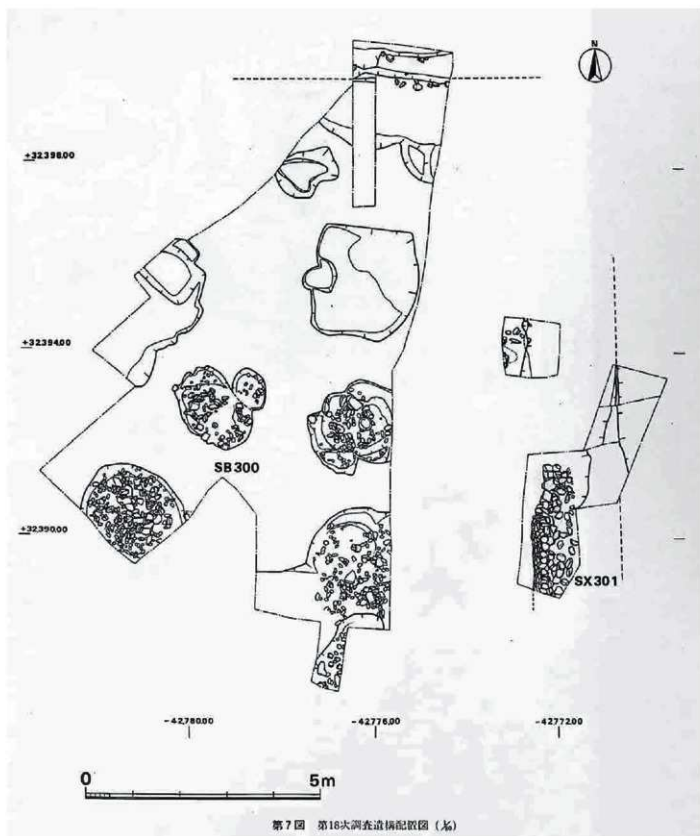
1 調査の経過

第18次調査は、講堂跡の東南約80mに位置する版築基壇の確認調査である。発掘調査は、調査区域が狭いため随時発掘、実測図作成、写真撮影を実施してほぼ全面を発掘した。調査の結果、版築基壇は予想より残存状態はよく、礎石抜き跡5ヶ所と地形の北縁及び東縁を確認した。地番は、国分町字宮ノ脇742番地である。

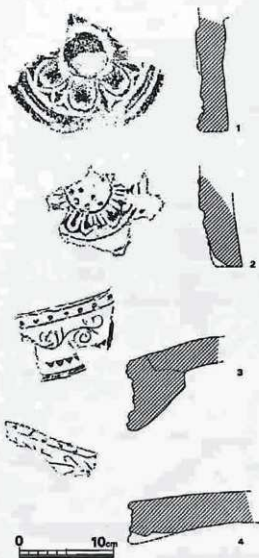
2 検出遺構

S B 300 版築基壇は、釈迦堂が建っていた区域のみ残存し、周囲は道路や宅地として削平されていた。基壇は、深さ約70cm程の地形を掘り込み、互層に版築し1m以上のものを造り上げている。地形の広さは、北縁と東縁のみの確認であるため、正確さに欠けるが東西約21m、南北約18mが推測される。基壇上には、5ヶ所の礎石抜き跡が発見され、抜き跡には根石が残存していた。確認された抜き跡は、それぞれの配置状態から心礎と東北四天柱と東側柱の礎石跡であることが判明し、この位置に塔が建てられていたことが明らかになった。規模についても、正確に捉えることができなかったが、東側柱の柱間は中央間約3.6m(12尺)、脇間約2.7m(9尺)が推測できた。

S X 301 川原石を木口積にした高さ約1m以上、長さ約3m以上の遺構である。面は西側面が整備されており、東側は青色・黄色等の粘土によって強く締めつけられている。検出した部分の北側3分の1は、現代の井戸によってこわされており、遺構の西側には黒褐色砂質土が堆積しており若干悪臭を発し、発見される遺物は近世陶磁器であった。



第7图 第16次调查遗构配置图 (1/6)



第8図 第18次調査出土遺物（凡）

3 出土遺物

遺物は、瓦が主体を占めているが、いずれも擾乱部分からの出土であり、軒先瓦・平瓦・丸瓦である。また土師器、青磁の小片も若干みられた。

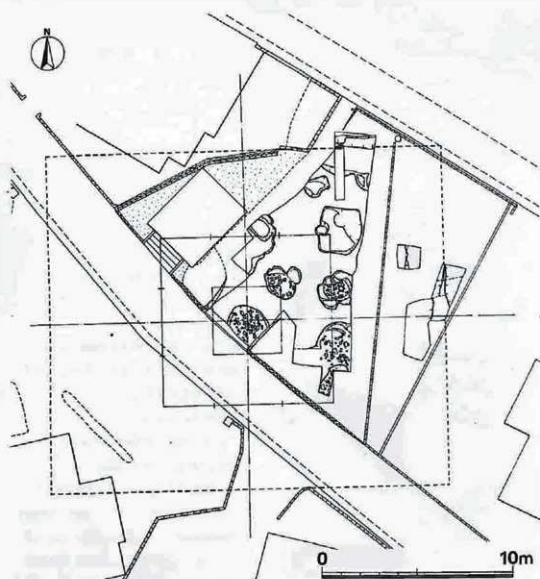
瓦 類（第8図）

軒九瓦（1～2）

1は瓦当部のみで外区に弧文を付し、内区には、単弁七弁と蓮華文を有する。中房には蓮子の痕跡はみられるが数については不明である。焼成はあまりよくなく、器壁は摩耗が著しい。2は瓦当の一部であり、内区に複弁の蓮華文を付し中房には1+4+8の蓮子を有する。焼成は悪く褐色を呈する。

軒平瓦（3～4）

3は、内区に均整唐草文を陽刻し、上外区に珠文、下外区に鋸歯文を付している。焼成は非常によく、器壁は堅固であり灰青色を呈する。4は、内区に均整唐草文を陽刻し、外区及び脇区に珠文を付している。焼成は良好であり、黒褐色を呈しているが器壁は若干摩耗している。



第9図 京後園分僧寺跡塔復元図 (1/500)

V 第19次調査

1 調査の経過

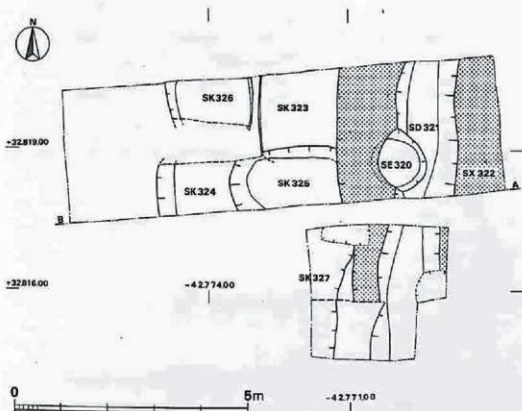
第19次調査は、国分尼寺跡の確認調査である。国分尼寺跡は、国分町字西村一帯に推定されているが、すでに住宅が隣接して建てこんでおり、発掘調査は不可能と思われていた。しかし、今回当該地において建物を解体されたので、この機会に確認調査を実施することとした。調査の結果、種々の時期の遺構が重複しており、尼寺跡に直接関連する遺構は発見されなかった。地番は、国分町西村497番地である。

2 検出遺構

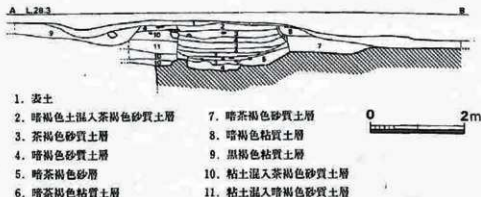
検出された遺構は、いずれも時期を示すような遺物は発見されなかった。当該地の地山は、国分僧寺跡が黄褐色粘質土を占めているのに対して、灰褐色砂礫層であった。

SE 320 径約1m、深さ1mを測る比較的浅い井戸である。内部には川原石や瓦片などが放り込まれており、これらには鉄分が付着し埋没して時間が経ていないものと思われる。

SD 321 幅約1.2m深さ約30cmの南北に走向する溝状遺構である。堆積土中には現代の陶磁



第10図 第19次調査遺構配置図（北）



第11図 第19次調査区土層図 (㌢)

器片等が発見された。

S X 322 規模及び性格は不明である。遺構内の堆積土は、川原石や青灰色粘土を混合した土であり、鉄分が多く含まれている。

S K 323・324・325・326・327 土壇状遺構であり、性格は不明である。遺構内の堆積土はいずれも砂質土であり、S K 323・325は横溝状に堆積している。深さは約0.2～1 mである。S K 327は、未掘であるが堆積土の質は同様である。

3 出土遺物

遺構内から出土遺物は、ごく少数で須恵器、弥生土器等が発見されたが、これらの遺物が直接に遺構の時期を決めるには困難である。

VI 第20次調査

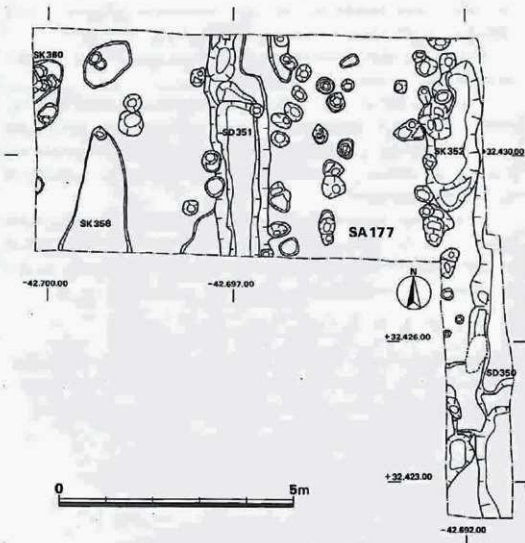
1 調査の経過

第20次調査は、病院建設に先がけて緊急調査を実施した。当該地は、第10次調査の北側約50 mのところ为国分僧寺寺域の東限と考えられる場所である。調査区域の南側大半は戦時中の防

空壕ですでに擾乱され、北側を中心に調査をおこなった。調査の結果、溝状遺構と土壇、ピット多数が発見された。土層は表土(35cm)と暗茶褐色の包含層(25cm)の2層のみで、包含層中には、瓦、土師器、銅滓などが多く包蔵していた。今回確認された2条の溝状遺構と第10次調査におけるそれは、同一の遺構であり、筑後国分寺の東限を画する東面築地の方向を決定づけたものである。地番は、国分町字宮ノ脇744-3番地である。

2 検出遺構

遺構は、南北に並行して走向する溝状遺構2、土壇3、ピット多数を検出した。



第12図 第20次調査遺構配置図(%)

SD 350 東側の立ち上りは道路の為検出できなかった。溝の幅は不明だが、深さは地山面から約35cmである。堆積土は黒褐色粘質土で、瓦、土師器片をかなり包蔵する。溝の形状は直線的だが、掘り方は土壇を連ねたように凸凹がある。

SD 351 SD350の西側に並行して走向する溝で、幅0.7~1.25m、深さ31~41cmを測る。SD176は浅いが堆積土は黒褐色粘質土で、瓦・土師器・須恵器片を多く包蔵する。溝の中ほどに、銅・鉄滓（スラッグ）を多く混入し、一部には焼土ブロックもみられた。溝の形状は直線的だが、掘り方に画一性がみられない。

SK 352 南北に細長い土壇で、長径3.3m、短径1.1m、深さ36cmを測る。壁面はゆるやかな立ち上りで、堆積土は暗褐色粘質土である。遺物は土師器が多いが、完形品はない。土壇は柱穴を切って掘られている。

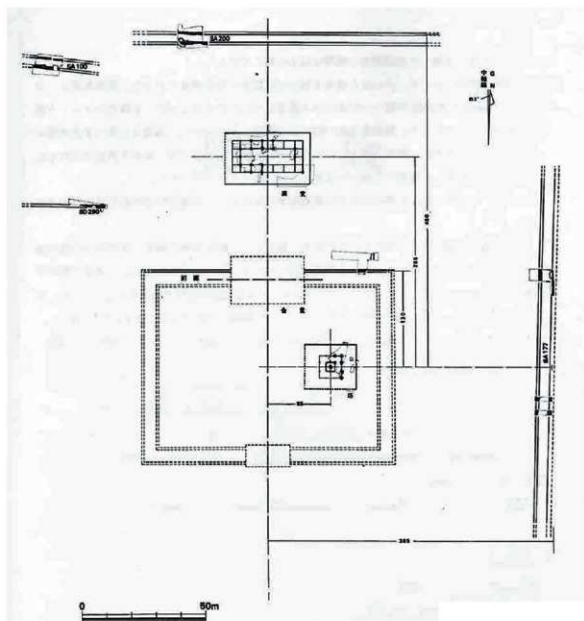
SK 358 赤褐色・黒色の焼土や木炭が一面に広がり、銅滓・鉄滓が多く出土した。遺構は浅く最も深い部分でも11cmしかなく、底面に焼けた痕跡はない。

SK 360 西側は未掘だが、検出したのは、長さ1.5m、深さ40cmを測る不整形の土壇である。堆積土は、赤褐色の焼土と木炭を多量に含み、径5cmほどの銅滓、鉄滓が多く出土した。南側ピットも同様の状況である。SD351の西側の遺構には、それぞれ堆積土にスラッグが多く出土したが、SD351を切るピット2基は、焼土が特に多くみられる。スラッグは、大澤正巳氏の観察によると9割が銅滓である。

SA 177 SD350とSD351の2条の溝を雨落溝とする築地跡であり、第10次調査の築地跡の方向性から同一のものである。両溝の中心距離は約5.5m、内法は約4.5mを測る。両溝に挟まれた空間には数多くの柱穴が検出されたが、一定の法則で並ぶ遺構はみられなかった。柱穴は、径40cmほどで深い柱穴では46cmを測るものもあった。

3 出土遺物

遺物は、土師器をはじめ瓦、須恵器や、鉄及び銅のスラッグなどが発見された。SD350出土の遺物は、瓦片が多く、土師器などはわずかに小片のみが発見された。SD351出土の遺物は、溝内上層に多くの土師器がみられ、瓦は少ない。また須恵器は長頸壺の底部が発見された。



第13図 主要道構配置図 (※数字は実測距離を1尺=0.3mで除し、これに近い整数をとった。)

Ⅶ 小 結

昭和55年度に実施した発掘調査の概要は以上の如くである。

本年度の調査において、大いなる成果を見たのは塔跡の発掘調査であった。版築基壇は、字宮ノ脇742番地の釈迦堂が建つ一区画にのみ遺存していたにすぎないが、東隣地のトレンチ調査を実施することにより、塔の東北部の四半分を確認した。しかし、基壇及び塔の平面規模は推測することが出来た。第20次調査において築地跡を検出したことは、第10次調査のそれを結ぶと寺域東限を画し、築地の方向がほぼ真北方位を示すことが得られた。

ここで、本年度の調査と前年度までの調査結果をふまえて、筑後国分寺伽藍配置の推定を試みた。

調査の結果を集約すると次のとおりである。第1に、7間×4間の講堂と3間四方の塔の南北中軸線は、それぞれ真北より約2度程西に振れている。第2に東限の築地は、講堂と塔の中軸線とは異なった方位を示す。第3に、S A 200・S A 100は時期的な差は認められないが、方向性で別の遺構と考え、西限築地はS A 200とS A 100の間に所在するものと思われる。第4に、昭和44年度の福岡県教育委員会の発掘調査に拠り確認された南B 1 トレンチの東西方向の溝は、位置的に回廊雨落溝と考えられる。

これらの結果をもとに、一案として塔を基準にそれぞれの距離を計測すると、第13図に示すような数値が得られ、前年度まで筑後国分寺の伽藍が、筑前国分寺の伽藍と同じ配置であろうと推定したことは、本年度の調査結果でほぼ違いないものと思われる。また寺域の範囲についても、東西幅が塔の中軸線上で約600尺以上を超えることは考えられず、従来の寺域方2町説を当て嵌めるのは困難と考える。

遺物については、未だ未整理であり本概報に掲載したのはごく一部である。

図 版



第16次調査区全景（東から）



S K 280大形土壇状遺構（東から）



第16次調査補足調査区全景（南から）



S K 280大形土塚状遺構補足調査部分（西から）



S K280 出土軒丸瓦



S K280 出土
鬼瓦



S K280 出土墨書土器



S K280 出土埴



第17次調査区
全景（西から）



SD290 溝状遺構（東から）



第18次調査区
全景（北から）



第18次調査区全景（南から）



S B 300 塔跡東側柱礎石抜き跡
(北から)



S B 300 塔跡東北四天柱礎石抜き跡
(北から)



S B 300 塔跡心礎抜き跡 (北から)



S B300 塔跡基壇北縁辺部 (東から)



S B300 塔跡基壇土層断面

第18次調査
出土軒丸瓦



S X 301 石積み遺構
(北から)





第19次調査区全景（東から）



S K325 土壇状遺構土層断面（北から）



第20次調査区全景（西から）



SA177 築地跡（北から）

筑 後 国 分 寺 跡

-Ⅲ-

昭和56年3月31日

発 行 久留米市教育委員会
久留米市城南町15-3

印 刷 布 屋
久留米市城南町18-34